



TITLE:

<Post-symposium
Considerations>Qasbah Cube: 地域
学習施設を核とするコロノ歴史
地区の居住環境の継承と創造

AUTHOR(S):

山田, 協太

CITATION:

山田, 協太. <Post-symposium Considerations>Qasbah Cube: 地域学習施設を核とするコロノ歴史地区の居住環境の継承と創造. CIRAS discussion paper No.81 : Architectural and Planning Cultures Across Regions --Digital Humanities Collaboration Towards Knowledge Integration 2018, 81: 90-93

ISSUE DATE:

2018-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_81_90

RIGHT:

© Center for Information Resources of Area Studies, Kyoto University

Qasbah Cube

地域学習施設を核とするコロンボ歴史地区の居住環境の継承と創造

山田 協太 Kyota YAMADA

京都大学 *Kyoto University*

対象地: コロンボの歴史地区 (Wolvendaal, Colombo 12)

プロジェクトの背景: コロンボの歴史地区は、17世紀に形成された市街地で、都市中心部に位置する。プロジェクトの対象地は歴史的にムスリムの居住地となってきた。イギリス植民地期の1880年代から高密度居住地となり、1947年のセイロン独立以降、スラムと認識されるようになった。人間主義の開発が力を持った1970年代から80年代の一時期を除き、市民、コロンボ市政府、あるいは国際社会の関心がこの地域に向かうことはなかった。薬物取引の中心地として知られ、外部の居住者は関与することを避けてきた経緯から、都心に位置しながら地域の実情はコロンボでもほとんど知られていない。

いわゆる貧困層の住むこの地域では、人びとの集まるティーショップ、路地とそこに並ぶ小規模住居のセットとなった居住地であるレーンをはじめ、日常の種々の活動のおこなわれる多様な場所が歴史的に継承されており（本Working Paper所収拙著Fig.3および4）、そうした一揃いの場所が緩やかに結びついて居住環境を形成し（同Fig.5）、住まい手の生活を支えてきた。こうしたムスリムの自律的な居住地は、カスバQasbahと呼ばれた。カスバでは、場所を基礎とする自治の仕組みが成立しており、それによって居住環境は存続してきた。

カスバは、住まい手の生活の基盤となってきたが、1980年代以降、一方では経済成長によって、他方では紛争によって大きく傷つき、存続の危機にある。経済成長では一部の富裕化した住民によって、貧困者の住まいとなってきたレーンと呼ばれる長屋型居住地の解体と再開発がおこなわれた。紛争時には薬物取引グループ間で抗争があり、多くの若者の命が失われた。現在、世代交代と共に薬物取引は下火となり、地域の居住環境には再構成の機会が訪れている。同地域で著者がこれまでおこなってきた研究から生まれた縁を背景として、居住

者有志と協働で、地域居住環境再生のデザインプロジェクトをおこなうこととなった（図1）。



図1 居住者Z

プロジェクトの目的: コロンボ歴史地区の居住環境としてのカスバは、住まい手の生活の貴重な基盤であるが、万能ではない。また、経済成長と紛争によって大きく姿を変え、今日、社会と自然環境の両面でいくつかの問題を生じている。紛争の終結した2009年以降の新たな経済成長の中、歴史的に継承されてきた場所のいくつかは再開発によって失われつつあり、生活基盤としてのカスバの存続は曲がり角にある。本プロジェクトQasbah Cubeでは、住民の生活基盤となってきたカスバを継承しながら、その欠点を補完し問題を解消するとともに、住まい手の自治能力を向上させることで、地域居住環境を持続可能で今日的な姿に更新する。



図2 住居に挟まれた暗い路地

具体的手法: カスバを構成する主要要素であるレーンを対象とし、欠点を補完する新たな活動とそれがおこなわれる場所をレーンに埋め込むことで、居住環境に新たな場所を組み入れ、活力ある居住環境へ更新する（同 Fig.7）。これまでの住まい手との議論をつうじて、抗争で悪化した近隣関係を修復することが、住まい手自身によって地域社会の主要な問題として対象化されている。居住環境を更新する核として、本プロジェクトでレーンに埋め込む新たな場所は、地域学習塾である。地域学習塾では、地域の来歴を伝えるとともに地域の未来を志向して子供の教育支援活動をおこなう。この活動を介して、対立関係にあった親たちが子供の送り迎えで集まる契機と場所をつくり、次世代を育成すると同時に住民間の新たな関係を形成することが地域学習塾の眼目である。また、コロボ歴史地区の居住環境は家族を構成単位としており、レーンの解体などの事情で家族を失った子供には生活の基盤を提供しない。家族を失った子供たちを受入れてその生活基盤となることで、居住環境に、家族にとらわれない共用の場を形成することも、地域学習施設の目的である。レーンには、自然環境面での問題もある。1980年代以降の経済成長で得た資金によって、個々の住まい手がプライベート空間を最大化するかたちで住居を増築したことから、レーンの共用空間となってきた路

地が圧縮されて、通風、日照が悪化した（図2）。また、増築後の鉄筋コンクリート造の屋根の蓄熱とブロックの壁による通風の遮断によって、室内は暑く住みにくい。

地上面は既に建て詰まっているため、地域学習塾は既存の住宅の上に増築し地上3階に建設する（図3）。良好な日当たりと風通し残る上階が、住まい手の集まる新たな場所となる。その際に、前面路地に日当たりのよい小広場を新たに整備し、上昇気流を生む垂直の吹き抜けとすることで、吹き抜けの小広場には、陰になった周囲の路地から涼しい空気が流れ込む。こうして路地全体をパッシブな空気循環を生む仕掛けとすることで、レーンの自然環境を再生する（図4）。地域学習塾へ登る階段とテラスは、垂直方向の新たな路地となる。Qasbah Cubeは、地域学習塾と、路地を空気循環の軸とする仕掛けによって、路地、レーン、カスバを社会、自然環境の両面で共有財産として再生し、三次元（Cube）化されたカスバへ更新する。

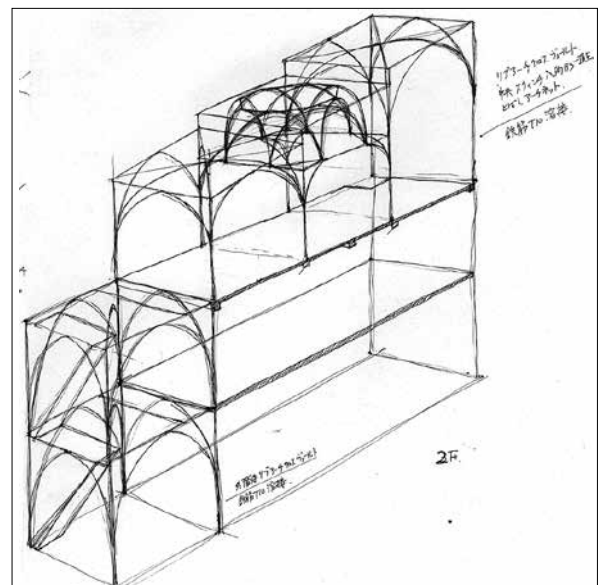


図3 地域学習施設案（3階）

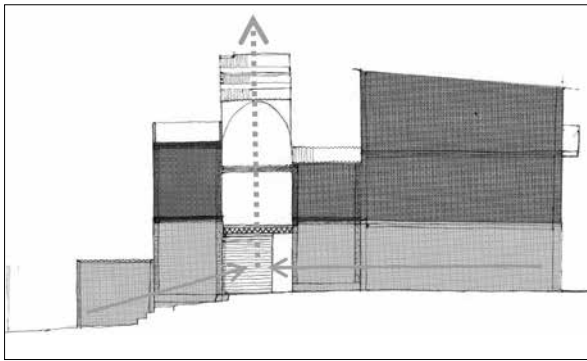


図4 垂直ヴォイドを持つ小広場

プロジェクトの経過:当初は、両隣の親族の住居の構造体を借り、その間を複数のパタンの梁でつなぎ上階を増築する設計だった(図5)。しかし、着工直前に隣家の一方が構造体の貸与に不安を示したため、現場で設計を変更し、構造体の貸与に不安を示した家との戸境には、推奨される強度を持つ標準的構法によるRC柱列を建てることとした。そこからもう一方の家へ間口方向の梁をかけて構造体を一体化する。接合部の配筋と柱梁の組みあわせ方を構造デザイナー、地元大工と共同でデザインし、建築より小さなスケールの柱、梁とその接合法のパターンを開発した(図6)。標準的構法によるRC柱列はレーンの共有財産となる。各戸がこのRC柱列を建設し、そこから梁を出して隣接する住居の構造体と接続する構法を繰り返すことで、総体としてレーン全体で不完全なラーメン構造の形成を目指す、「オープン・グリッド」を提案する(図7, 8, 9)。

あらかじめ定まった形や規模を必要とする建築をデザインの単位とせず、その構成要素である柱や梁と、要素間の接合方法をパターン化することで、オープン・グリッドは、完結した完成形を持たず、隣接世帯が必要に応じて柱梁を接合することで拡大し、物的コモンズとしてレーンに蓄積される。

構造体を新規に建設する世帯は、隣接する構造体を借用し、独立した構造体よりも3割は安価での建設が可能であることから、既に複数の世帯で実施された(図10)。住まい手を建設主体とし漸次建設するオープン・グリッドは、ハブラーケンの論じた生活を支える構造体「サポート」を、インフォーマル状況において実現する解となる。室、宅地割寸法の共通性から、コロボ歴史地区一帯で実用可能な居住環境形成手法である。インフォーマルな居住環境のデザインでは、通常の設計と異なり、完成

像は常に変化する暫定的メージである。現場と当事者との関係を出発点として、生活の変化や建設プロセスの進行とともに完成像を随時更新するアクティブ・プランニング(O.ケーニヒスベルガー)が、プロジェクトの実施を支えている。2017年8-9月の第1期工事で構造体が完成した。2018年3月に第2期工事をおこない階段と屋根を架ける。2018年中に第3期工事として内部仕上げをおこない、地域学習塾の運営を開始する見込みである。

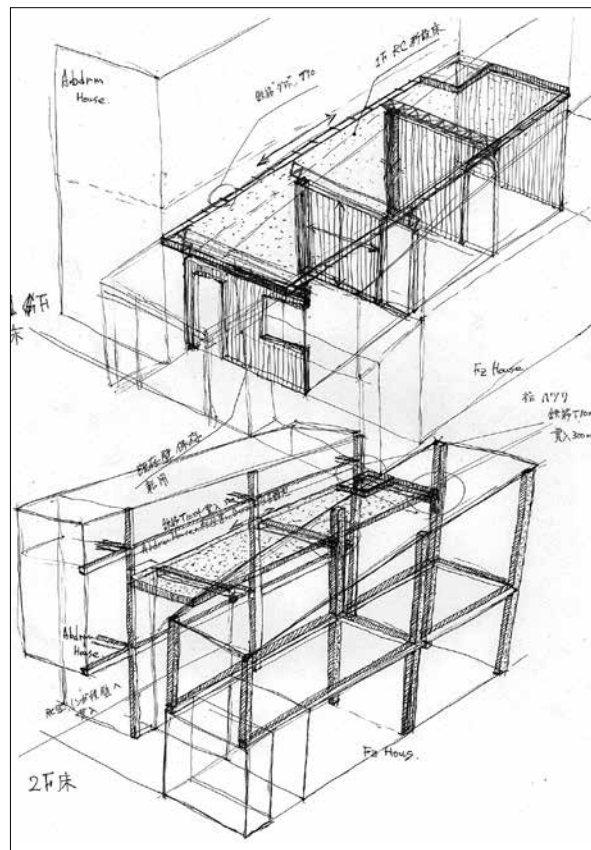


図5 事前に検討した改修案

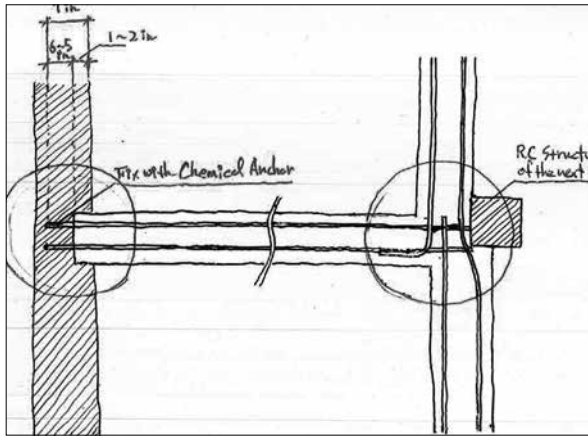


図6 柱と梁の接合部の配筋のパタン化

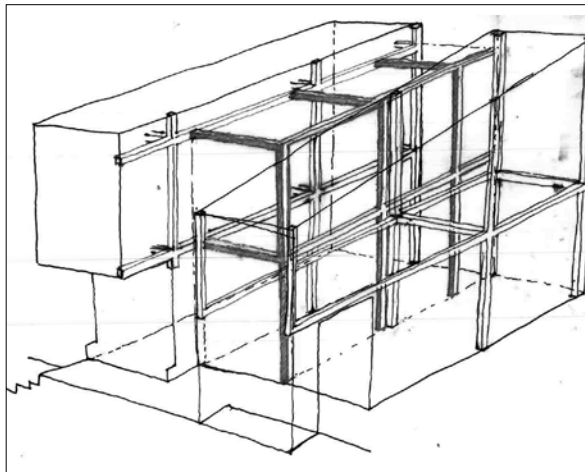


図7 RC柱列による隣接住居の接続



図8 RC柱列の建設



図9 完成した構造体

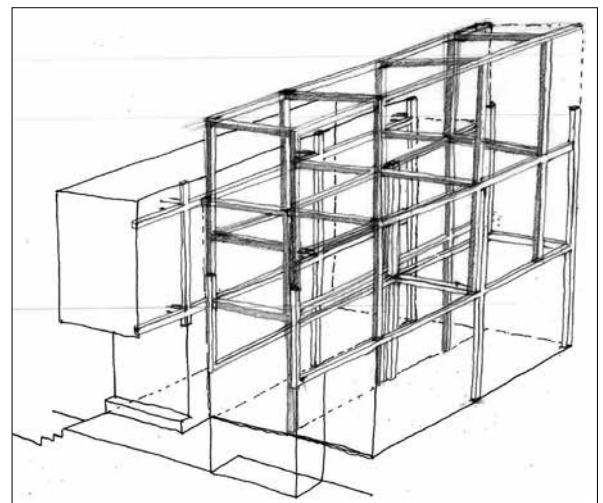


図10 その後の増築によるRCグリッドの拡大